The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第15回臨床哲学フォーラム「臨床を書く、そのくるしみ」の特集にあたって
Author(s)	ほんま, なほ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 9-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103630
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第15回臨床哲学フォーラム「社会の臨床、そのメチエとエチュード」
テーマ「シリーズ第１回　臨床を書く、そのくるしみ」

第15回臨床哲学フォーラム「臨床を書く、そのくるしみ」の特集にあたって

ほんま　なほ

日時：2025年１月11日（土）14時～ 17時
場所：大阪大学豊中キャンパス全学教育総合棟３４１ＣＯデザインスタジオ
主催：大阪大学倫理学・臨床哲学研究室
共催：ＣＯデザインセンター

【企画概要】

シリーズ「社会の臨床、そのメチエとエチュード」では、社会の臨床における実践の〈メチエ〉、つまり、〈からだをはたらかせて、ことをなす〉という営みに、しっかりと根をおろしながら、その〈メチエ〉を他者につたえ、知恵としてわかちあう、その先にある研究のすがたをともに探っていきます。

臨床哲学は、そのはじまりから、学問はどうありうるかを問う、「学問論」でもありました。既存の方法主義にのっとるのではなく、あくまで「学問はどうありうるか」を問いながら、しかし、ものごとを俯瞰する抽象論におわることなく、手や足、そのほかのからだや感覚を研ぎすますような、研究に参加し、実行するための試論、練習、〈エチュード〉をみなさんとともに、奏でていきたいとおもいます。

第１回は、さまざまな臨床の場面に身をおいてきた教員と大学院生４名が、臨床を書くことのむずかしさ、その苦しみについて、語ります。第２回以降は、他分野の研究者、実践者をゲストに招きながら、大学院教育の制度にかかわる問題についても考察していく予定です。

【プログラム】

臨床哲学の未解決事件簿ふたたび
　――経験をかたり、書くことのむずかしさ　ほんま なほ（大阪大学）
悲惨な経験を記録する（recordari）
　――禍・災に臨む哲学〈臨床〉のメチエを考える 西村 高宏（大阪大学）
インタビューもいやだし、自分を書くのもいや　　齊藤 如穂（大阪大学）
言葉、声、文体を探す
　――精神医療をめぐる経験を記述するための哲学　大野 美子（大阪大学）
耳をすませ、この〈こえ〉に
　――〈りんしょう・てつがく〉の真理論　ほんま なほ

臨床哲学の未解決事件簿ふたたび
経験をかたり、書くことのむずかしさ

ほんま　なほ

「臨床哲学」という試みが大阪大学ではじめられてから、ことしで30年になろうとしています。老い衰え、死亡宣告までなされた哲学のいわば延命措置として、皮肉にも「臨床」を名に冠した先人たちのその試みは、まずは哲学の自己治療と回復にそれだけの時間を必要とした、といえるかもしれません。しかし、はたして哲学は回復したのでしょうか？ むしろ、わたしたちは、そうした哲学の延命措置など顧みることなく、とうに床をとびだして、社会のなかでひとびとと交わりながら、哲学とはいわない哲学、フィロソフィを生きはじめたのではなかったでしょうか。

この新シリーズ、「社会の臨床、そのメチエとエチュード」では、そのような意味をこめて、「哲学」をすててしまって、診断や治療という意味が残響する「臨床」ということばに不協和な音を混じらせて「社会の臨床」といい、しかも、その「社会」も、社会学とか市民社会論とかではなく、ひとやものが会する場所だとかんがえてみる。そこから再出発したいとおもいます。わかりやすくいうならば、ひととひとがまみえる場所でなにをするのか。まずは、その〈メチエ〉、つまり、〈からだをはたらかせて、ことをなす〉という営みとその流儀に、しっかりと根をおろす。そして、その〈メチエ〉を他者につたえ、知恵としてわかちあう。それにとどまらず、その先にあるかもしれない、まだはっきりしない研究のすがたを、手探りでともにかんじるようと試みる。そういうことをやっていきます。

まだはっきりしない研究のすがた、といいましたが、臨床哲学は、そのはじまりにおいて、学問はどうありうるのかを問う「学問論」でもあったことをおもいだしましょう。既存の研究方法にのっとるのではなく、あくまで「学問はどうありうるか」を問う。しかし同時に、ものごとを俯瞰する抽象論におわることなく、手や足、そのほかのからだや感覚を研ぎすます。絵画が「見えるとはどういうことか」を探り、音楽が「聴くとはどういうことか」をかんがえ、踊りが「からだはどのように感じるのか」を知ることであるように、そして、そのそれぞれの営みをとおして、わたしたちがからだを動かして、世界を探索するように、ともに探究に参加し、実行するための試論、練習、〈エチュード〉をみなさんとともに、奏でていきたいとおもいます。

シリーズ第１回をはじめるにあたって、まず、鷲田さんが臨床哲学を構想していたころに、カール・レーヴィットの「二階建ての家」の比喩にふれていたことをふりえってみましょう。

> 日本人は言ってみれば二階建ての家に住んでいて、一階では日本的に思考したり感覚したりしているが、二階にはプラトンからハイデガーにいたるまでヨーロッパの学問が紐に通したように並べてあるという、あの痛烈な皮肉である。これは

おそらく、日本人の講壇哲学者たちが二階で研究者として使用する言語と、ひとりの生活者として一階でいわば前学問的に使用している言語との、ほとんど架橋不可能な断絶への警告でもあった。

（鷲田清一「哲学の言葉」『臨床哲学』第1号（1999）９頁）

わたしが大学院生だったころ、哲学講座の研究室は文学部の四階にありましたが、その後、建物の耐震工事を経て、講座の配置が変わったときに、三階まで降りてきて、現在に至りますが、いったい一階に降りるのはいつのことになるでしょう？ そういった冗談はさておき、あいかわらず、レーヴィットの「二階から哲学する」的状況が、日本の“哲学輸入業者”たちのあいだでくりかえされているのではないでしょうか。

たしかに、近年、応用哲学的な社会関与が散見されるようにはなりました。たとえば、20世紀のなかごろにはもう息途絶えたとおもわれる現象学や分析哲学が、ゾンビのようにまた動きだして、社会に関与すべく「経験の質的記述」とか、「定義の改良」とかを言い出しています。しかし、諸経験のなかに生成する意味構造を分析するにせよ、言語（概念）の改良による経験の再編集を目論むにせよ、それらが、理念ないし効果として経験をあつかうといいながらも、学から生活に向かう、という方向をあきらめないままで、真に経験のなかに意味を見出すのは学問である、経験を有用に加工するのは学問である、という知の植民地主義にとらわれているのではないでしょうか。（じっさい、そのような批判は再三、歴史のなかでくりかえされてきたにもかかわらず。）しかも、それをあいかわらず「海外」から仕入れて日本語で加工するというかたちで。

臨床哲学を提唱した先人たちは、人文学であれ、社会科学であれ、このような知の制度そのものに意義を唱えたのだ、とわたしは理解しています。つまり、「一階」が生活の場を意味するならば、〈臨床〉のまえに、そこはまず、わたしたちが寝起きする床であり、〈臨床〉というならば、それは〈ひとびとが出会う現場〉となり、そこで哲学するというならば、ひとびとの〈生身の関わり〉を追求することにほかなりません。

このようなひとびとの〈生身の関わり〉を対話と言いかえるならば、それは逆説的にも、見ざる、きかざる、言わざる、の３つの〈非〉の実践からなる、とかんがえることができるかもしれません。つまり、「見ざる」とは、ひとつにまとまらない、輪郭からのがれゆくもののもとにとどまる、つまり、「概念」をあきらめること、そして、「きかざる」とは、したがわない、不規則で、再現不可能なものを尊ぶ、つまり、「方法」を手放すこと、さいごに、「言わざる」とは、いつ、どこ、だれ、その場の秘密を守る、つまり、「普遍」を笑い飛ばすことです。じっさい、対話を対話たらしめるものは、この〈非概念〉、〈非方法〉、〈非普遍〉ではないでしょうか。逆に、そうでないもの、つまり、原理、実験、法則は、対話ではないもの、パウロ・フレイレのいう反-対話だ、といえるでしょう。これら３つの〈非〉の実践にとどまりつづけることが、記述、調査、原理といった学問の作法からわたしたちを自由にする、〈対話〉のメチエとエチュードとなる、ということがわたしのかんがえです。

ところで、このような〈非概念・非方法・非普遍〉を真摯に受けとめるとなれば、いっそう大学での研究へのアプローチは困難をきわめるようにおもわれます。そこで、

2021年12月8日にオンラインで開かれた臨床哲学フォーラム「人の生と研究をめぐる倫理」において、わたしが発表した内容（「制度としての臨床哲学をかんがえる」）を思索のドキュメントとして、ふりかえってみることにします。

臨床哲学の未解決事件簿

事件簿１「古典（テクスト）」問題

わたしは、この発表のなかで、「臨床哲学の未解決事件簿」という、すこしおどけたようにもみえるけれど、真剣な投げかけをしました。その事件簿その１が、「古典テクスト問題」です。「（臨床）哲学を学び、実践するために、これまで「古典」とされてきた哲学書を読む必要があるのか？」という疑問にいまだ臨床哲学はこたえていないのではないか、という問題です。

> この問いに、前職の教員は答えられませんでした。なぜなら、すでにその教育をたたきこまれて捨てることができなかったから、彼らにとっての問いではなかったのです。議論すらしませんでした。古典（テクスト）を（どのように？）読むことは、はたしてかんがえること、対話することの「リソース」になり得るのか、真摯に議論すべきです。
>
> > 「『偉大な』思想家というのは、いわば『考えること』についての『スーパースター』である。その『スーパースター』の思想に触れ、その『離れ技』『スーパープレー』を目の当たりにして驚嘆するとともに、その『技』を真似ることで自分自身が思考する際の『技』を身につけていく。」（土屋貴志「倫理学するのに倫理思想研究は（なぜ、どこまで）必要か」『倫理学研究』48巻、2018.）
>
> たしかに、かんがえる「技」をみがくために、古典（哲学書）を読む、ということは選択肢のひとつとして、アリかもしれません。しかし、その技を習得するの一生かかってしまったら、あるいは、一生かかっても身につかない場合はどうしたらいいのでしょうか？
>
> （2021年発表資料より）

事件簿２「調査」問題

つぎに、未解決問題のその２は、「調査問題」です。「（臨床）哲学を学び、実践する者は、調査法を身につけるべきか？」という疑問に、わたしをふくむ現役の教員たちはいまだにこたえをだせていません。

> この問いにも、前職の教員は答えられませんでした。なぜなら、彼らは特定の現場に長期にかかわることをせず、現場の声を引き受けて応答する、ということに背を向けてきたからです。それでは、参与観察やインタビュー調査を学び、実施すべきでしょうか？　だとすれば、それは社会科学の方法とはなにがちがうの

でしょうか？　文献学か、調査か、事例研究か、という選択肢しかないのでしょうか？

ここでも、実践への関与が問題となります。実践者としてある場所やひとにかかわるかどうか。西村ユミさんの看護実践研究は、患者にかかわるおなじ看護師としての、看護の実践についての研究でした。おなじように、哲学や対話をともに実践する他者へのかかわりについて研究する、とすれば、どうすればいいのでしょうか？（わたしは、他者が実践してきた哲学を哲学として研究しています。）

文献学、調査、事例研究、いずれも事象を対象化する方法論にもとづく対象知です。哲学や人文学は、そのような対象知とはことなる知（例：フロネーシス）を探究してきたのではないでしょうか？

（2021年発表資料より）

事件簿３「論文」問題

さいごは「臨床哲学を学び、実践する者は、どうやって論文を書き、評価されるべきなのか？」です。

この問いに、またしても、前職の教員は答えられませんでした。なぜなら、すでに教授職にあったので、査読を受けることがなかったからです。

ちなみに、わたしは実践にもとづく「論考」を発表したり、書いたりしましたが、ほとんどすべて「査読」を通りませんでした。せいぜい「実践報告」扱いでした。理由は、正統とされるテクスト読解や調査法に頼らず、形式にのっとらないで直接に事象を扱ったからです。かなり自由度の高かった、人文学の書き物の可能性は、現在、おそろしく定型化し、その可能性をせばめられています。先行研究／問題設定／方法／結果／考察という科学論文のフォーマット、ピアレヴューという形式が、自由で破天荒な思考と書き方を抑圧しています。

背景にあるのが、研究者間の「競争」の激化、とりわけ若手研究者に対する査読論文数への圧力です。業績にならない文章を書く暇も、認められない主題にチャレンジする余裕もありません。

（2021年発表資料より）

昔話をして恐縮なのですが、大学２、３年生のときにわたしが哲学をおもしろく読んでいたころ、わたしはジャック・デリダの『絵葉書』という本に出会い、こんなおもしろい書き方があるんだ、とわくわくして、エッセイを書いたり、卒業論文では、片方ではオーソドックスな古典研究のスタイルにならいながら、もう片方ではデリダの書きかたを模倣して、ハイデガーの1923年の講義『事実性の解釈学』から1935年の講義『形而上学入門』までの、『ドイツ大学の自己主張』をふくむ約10年ほどのテクストの変遷のなかに〈政治的なもの〉の生成を読みながら、〈ともにある〉こと（Mit-Sein）の可能性をかんがえることを主題にして書いたりしました。そのせいか、指導教授たちから卒論の評価はとてもひどいもので、わたしは進学のために亡命先をさがさなく

てはならなくなりました。そして、その亡命先の大学院（阪大倫理学）でも、おもうように書くことはできず、（しないといけないと言われるので）いやいや学会誌に投稿していました。それでも、そのころは、いまのような論文のフォーマット化、画一化はなかっただろう、と記憶しています。

発表当時、わたしはこれらの「未解決問題」にこたえて、つぎのようにかんがえました。まず、「古典テクスト問題」については、「教養ある男性としてのジェントルマン」育成[1]、つまり特権階級形成のために人文学が果たしてきた役割は問題外であるとして、ひとが歴史的状況のなかに生き、それに応答する表現行為についての学としての人文学にはまだ可能性が残されているとかんがえました。ただし、欧米に偏った「偉大な作品・作家」研究から即座に袂をわかち、いかなる著作であっても、わたしたちと同等な未完了の表現行為のくりかえしとして、書くという実践を批評し、その表現行為を引き継ぐことができるようにならなければなりません。パウロ・フレイレの識字･対話教育のように、〈書く〉ため、〈表現する〉ために読むのでなければならない、ということです。

そうなれば「調査問題」については、先述したように、学が生活現場に降りていって調査と記述によって知を奪い盗るのではなく、むしろ、知恵がうみだされる現場や状況にいかに居あわせるのか、いかにともに行為するのか、ということこそが問題であり、現場から知が収奪されるしくみを批判することが重要になるだろう、とかんがえました。

そして、「論文問題」についても、科学的知の集積、つまり「先行研究」の積み重ねからなる真理の体系を補うのでもなく、また、未開拓領野の征服するのでもなく、まずは、「書く」ということの根本的な意味に立ち返ることがヒントになる、とかんがえました。とりわけ、文学者たち、たとえば、石牟礼道子や森崎和江のように、いかにみずからの書く手を他者に開けわたすのか。生きる知恵が遂行される現場に身を寄せて、事実と虚構をおりまぜながら書く文学、つまり、目の前にはいない「読者」をまえになされる書簡のような表現行為、作品の提示またはそのプロセスとして生活のことばで書く、ということの意味を再考する必要がある、と訴えました。

ざんねんながら、この2021年のフォーラムでは、時間がなかったために、わたしの問題提起についてほとんど議論することができませんでした。あらためて、「社会の臨床、そのメチエとエチュード」というシリーズのなかで、これらの問いについて検討していきたいとおもいます。

（ほんま・なほ）

[1] 吉見俊哉『大学とは何か』岩波書店、2011年